第三講　「心情」を読む

「文芸的文章」である「小説文」や「随筆文」には登場人物や筆者の心情を把握する問題があります。今回は「心情」のとらえ方を学びましょう。

Ⅰ　単純な心情

原因　→　心情　→　結果

※　心情把握問題の基本形です。

※　この場合は心情が書いていないことが多いため、原因と結果から推測して心情を把握する問題になっていることが多いです。

Ⅱ　心情の変化

原因A → 心情A → 結果A → 原因B → 心情B → 結果B

※　心情把握問題で一番有名な問題です。

※　心情Aから心情Bへの変化、そして変化の原因を三点セットで捉える必要があります。

Ⅲ　結合原因の心情

原因A ＋ 原因B → 心情 → 結果

※　原因Aだけ捉えて答えようとすると間違いになります。

※　原因Bは**「リード文」「会話文」「心中文」「過去シーン」**などにある場合が多いです。

Ⅳ　心情の交錯

原因Ａ　→　心情Ａ
＋
原因Ｂ　→　心情Ｂ
→　結果

※　分析が一番難しい問題です。

※　心情Ａの原因が原因Ｂになっていたりと、原因の部分を入れ替えての誤答選択肢が多いです。

心情把握問題解法

―「心情」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・原因 → 客観的事態や主観的事情
・心情 → ⊕心情や⊖心情
・結果 → 行動や反応や発言

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

（次ページより問題演習）

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

私の脱いだ靴下やワイシャツを「くさい」と娘が嫌うようになったのは、いつごろからだったろう。小学校の高学年あたりだろうか。いまでは私自身が「くさい」らしく、朝寝をした日曜日にパジャマ姿のままリビングに姿を見せると、しかめつらで「パパ、マジ、くさい。シャワー浴びてきてよ」とも言われてしまう。

「こら、そんなこと言わないの」と娘をたしなめる妻も、最近、少し心配そうに「口臭（こうしゅう）がキツくなってるわよ。歯周病（ししゅうびょう）とか、あと、胃が悪いんじゃないの?」と言う。新聞や雑誌で加齢臭（かれいしゅう）という言葉に目が留まるようになったのも、ここ数年のことだ。

においというのは、距離が近いからこそ感じ取ることができる。手紙や電話やメールなどでは伝えられない。そう考えてみると、たとえ妻や娘には嫌がられてしまうにおいでも、それを嗅（か）げる近さにまだ家族がいてくれるということを喜ぶべきなのかもしれない――負け惜しみの屁理屈（へりくつ）だと笑われてしまうだろうか。

それでも、私は思うのだ。思春期になった娘が、そしてやがて息子もきっと、父親のにおいを嫌ってしまうのは、においそのものではなく、家族の

距離の近さを拒(こば)みたいからではないのか。
　私もそうだった。娘よりもっと早く、小学一年生の三学期に入った頃(ころ)から、たった一人の家族のにおいを嫌うようになった。
　母のにおいは、工事現場の土のにおいだった。

　母は鏡台を持っていなかった。洗面所に置いてある数少ない化粧品も、母が鏡に向かってそれを使っているのを見たことはほとんどない。
　私は友だちの家に遊びに行くと、さりげなく——ときには友だちの目を盗んでこっそりと、お母さんの鏡台に近づくのが常だった。豪華な三面鏡のドレッサーというわけではなくても、そこには化粧品のガラス瓶が並んでいる。香水や頬紅(ほおべに)や口紅の香りが、うっすらと漂っている。それを嗅ぐと、なんともいえない華やいだ気分になる。鼻腔(びこう)の奥が甘いもので満たされる。(1)お母さんのにおいだ。うれしくなって、寂しくなって、頬がゆるんで、うつむいてしまう。
　父親の記憶がないせいだろうか、友だちのお父さんへの憧(あこが)れやうらやましさはなかった。むしろ母と友だちのお母さんとを比べて、一人で負けを背負い込んでしまうことのほうがずっと多かった。
　夕方になって家に帰っても、母は陽(ひ)が暮れきるまで工事現場で働いてい

る。がらんとした部屋には母の置き手紙がある。洗濯物を取り込んでおくように、風呂（ふろ）に水を張っておくように、宿題は晩ごはんの前にすませるように……。軒下（のきした）に干してある洗濯物の中には、母が仕事のときに使うタオルもあった。どんなに洗っても繊維（せんい）の中にもぐり込んだ土の汚れは落ちきらず、使い古しのタオルはいつも黒ずんでいた。風呂に水を張るときも、最初に浴槽（よくそう）をよく洗わないと底に沈んだ土が混じって、水が濁（にご）ってしまう。

手伝いをすませて宿題をしていると、やがて鼻がひくひくとしてくる。意識してそうしているわけではないのに、部屋に染（し）みついた土のにおいを鼻が嗅ぎ取ってしまう。そんなとき、私は決まって、友だちのお母さんの鏡台のにおいを思いだした。鼻腔の奥にまだかすかに残っているはずのお母さんのにおいを、もう一度取り出したくてしかたなかった。

空がすっかり暗くなった頃、母が帰ってくる。ばたばたと家に上がって、「ごめんなあ、すぐにごはんにするけんなあ」としわがれた声で言いながら洗面所に向かい、水を勢いよく流して、土埃（つちぼこり）と汗にまみれた手や顔を洗う。洗顔料など使わない。化粧水をつけるわけでもない。ミカンのネットに入れた固形の石鹸（せっけん）を手のひらにこすりつけるように泡立てて、手を洗い、顔を洗って、またばたばたと台所に駆け込んで、服も着替えずに夕食の支度に取りかかる。

留守番の寂しさから解放された私は、流し台の前に立つ母にまとわりついて、今日一日の学校でのできごとを事細(ことこま)かに話していく。母は手を休めることなく、ふうん、ふうん、と相槌(あいづち)を打ってくれる。だが、仕事がキツかった日や、私には言えない悲しさや悔しさを胸に溜(た)め込んでしまった日には、その相槌が間遠(まどお)になってしまう。面倒くさそうに話を切り上げたがることもある。二人きりの家族は、おしゃべりがぎこちなくなったときにとりなしてくれるひとがいない。母の疲れを察して静かに過ごすには、私はまだ幼すぎたし、留守番の時間はほんとうに寂しくて不安だったし、なにより――私は、母のことが、好きだったのだ。

　母の相槌がそっけなくなると、私は急に落ち着かなくなってしまう。虚空(こくう)をさまよいはじめたまなざしは、母のモンペのお尻(しり)にこびりついた土の汚れを見つけてしまう。洗面所で洗いそこねたうなじの汚れを見つけてしまう。好きなのだ。母のことが大好きなのだ。お母ちゃん、お母ちゃん、と心の中で呼んだだけで胸がじんと熱くなってしまうぐらい好きなのに、母が友だちのお母さんに負けているところばかり探してしまう。

　においがする。土のにおいが狭い台所にたちこめる。

「はい、お待たせえ、できたよお」

　母がつくる夕食にも、土のにおいは染みている。

母は学校が〈注〉半ドンの土曜日にも現場に出ていた。工事が遅れると、週末の夜中に突貫作業をすることも多かった。

そんな日は朝から憂鬱だった。夕方の留守番だけでも心細いのに、一人で夜を過ごさなければならない。友だちの家に泊まりに行かせてもらいたかった。せめて夕食のときだけでも、誰かと一緒にいたかった。「晩めし、食うていけばええがな」と言ってくれる友だちはいたし、お母さんから誘われたこともある。だが、母は決してそれを許してくれなかった。「そげなことしたら向こうに迷惑じゃけん」と、誰にも迷惑をかけないということに依怙地なほどこだわっていた。女手一つで息子を育てる母なりの意地だったのだろう。いまならわかる。ほんとうは、あの頃も、うっすらとわかっていたのだと思う。(2)わかっていたから、すねた。友だちのお母さんに負けてしまうのが怖いから泊まりに行かせてくれないんだ、と決めつけた。

一人で夜中まで留守番をする私に、母はおにぎりの弁当をつくってくれた。ふつうにご飯を弁当箱に詰めるのではなく、出がけの忙しさのなか、梅干し、昆布、かつおぶしと具を一つずつ分けたおにぎりをつくってくれた。ほんの少しでも食事時の寂しさをやわらげようとしてくれたのだと、

いまならわかる。あの頃もわかっていた。わかっていたのに、私はいつも、おにぎりを食べ残していた。

　土のにおいがするのだ。土のにおいの染みた手でご飯を直接握っているから、おにぎりも土のにおいにまみれている。嘘だ。そんなことがあるはずがない。だが、(3)私の鼻は――幼い心は、確かにそのにおいを嗅いでしまったのだ。

　いつもおにぎりを食べ残す私に、母はけげんそうに「もうおなかいっぱいなん？」と訊いた。最初のうちは適当なことを言ってごまかしていたが、やがて母は心配顔で「体の具合、悪いんと違う？」と訊くようになった。その顔を見ていると、申し訳なさがつのる。ごめんなさい、お母ちゃん、ごめんなさい、と心の中で詫びながら、私は言った。

「お母ちゃんのおにぎり、くさい」

　きょとんとする母から目をそらして、「土くさいけん、食えん」とつづけた。

　母は自分の手を見て、必死に気を取り直すように、「お母ちゃんは、いつも手を洗うとるよ」と笑った。

「それでも……くさい」

「なに言うとるん」

「くさいもんは、くさいけん、食えん」

母はそのとき怒ったのだろうか。泣いたのだろうか。悲しそうに微笑（ほほえ）んだのだろうか。記憶はあやふやだった。たぶん、逃げるようにして忘れてしまったのだろう。

それが、冬の終わりのことだった。

（重松清『よもぎ苦いか、しょっぱいか』による）

〈注〉半ドン＝午後が休みの日のこと。

問一　傍線部分（1）「お母さんのにおいだ。うれしくなって、寂しくなって、頬がゆるんで、うつむいてしまう」とあるが、なぜ「私」はこのように悲喜こもごもの思いにとらわれているのか、説明せよ。

問二　傍線部分（2）「わかっていたから、すねた」とあるが、（イ）何を「わかっていた」のか、（ロ）なぜ「すねた」のか、それぞれ説明せよ。

問三　傍線部分（3）「私の鼻は――幼い心は、確かにそのにおいを嗅いでしまったのだ」とあるが、その理由を説明せよ。

問四　波線部分「においそのものではなく、家族の距離の近さを拒みたいからではないのか」とあるが、それはどういうことか、「娘」と少年時代の「私」のエピソードを踏まえて、説明せよ。

（次ページより解答欄）

問一

問二

（イ）

（ロ）

問三

問四

第三講「心情」を読む　解答

問一

友人宅の鏡台から漂う母らしい化粧品の匂いを嗅いで、母のことが好きなのでうれしくなると同時に、友人の母に自分の母が負けていると思うと寂しくなるから。

問二（イ）

女手一つで息子を育てる意地を持つが故、母が誰にも迷惑をかけないことにこだわったということ。

（ロ）

母の意地が分るからこそ、夕食の時だけでもだれかと一緒にいたいという希望が叶えられないと思ったから。

問三

幼い作者は母と一緒にいたいと思っており、母が工事現場に行くため食事時の寂しさを和らげようとして作ってくれたおにぎりを拒絶したいと思ったから。

問四

作者は母と一緒にいたかったが、工事現場の仕事のためにそう出来なかったが故に、母を拒むようになったのと同様に、作者の子供達も作者と一緒にいたいが、あまり一緒にいることができないがゆえに、作者を拒むのではないかということ。